

8 切断壺形土器について

B地区の包含層（Y80区）から小型の壺形土器が出土した（口絵4、図V-1-45-156）。この土器に類するものは主に東北地方北部の縄文時代中期末葉から後期前葉の遺跡から出土し、その特徴から「切断壺形土器」（葛西1974、葛西・小幡2003）、あるいは「切断蓋付土器」（成田1986・1999）等と呼ばれている。この土器の最大の特徴は、焼成前つまりは生乾きの段階で文字通り土器を上下に切り離し、二分していることである。さらに使用に際して、上下を接合している点も特徴のひとつである。そして切断される器種は壺形に限られる。

このような特色ある土器は北海道内ではこれまで①函館市戸井貝塚、②函館市浜町A遺跡、③函館市石倉貝塚、④北斗市矢不來2遺跡、⑤森町濁川左岸遺跡A地区の5遺跡から破片資料を含め10個体が出土している。以下、道内での類例を紹介することとする。なお、葛西（2003）の集成・分類を参考に、切り離された上部を「上体」、下部を「下体」と呼称する。

石倉1遺跡出土資料は上体と下体が密着し横倒しの状態で出土した（図版31）。土器内部には土が詰まっていた。現存する部分で高さ3.9cm、底面はやや歪な円形で径は1.9cmである。胴部のほぼ中央に最大径があるが（4.6cm）、これは底面に対し水平ではなく、斜めになっている。口頸部は粘土接合面から欠損している。接合面の径は1.1×0.9cmである。文様はなく、底面と上体のほぼ全面および下体の5分の1ほどの範囲に赤色顔料が残っている。器面全体に塗布されていたのであろう。表面の化粧粘土が剥落している部分が数か所にあるほかは、平滑に調整されている。内面はヘラ状の工具で調整されその際の凹凸が残る。さらに底面内側は指頭で押し付けたとみられ、粘土が環状に盛り上がっている。内面の調整はやや雑といえよう。胴部上半部で切断している。これは細いひご状工具で連続して刺突することでなされたとみられ、上体と下体それぞれに痕跡がある。上体の平面観は楕円形。長軸方向の2か所にごく細い粘土紐を貼り付け突起を作り、中央部に径1mmほど、縫い針が通るほどの円形の孔が穿たれている。下体では胴部の張り出しのやや下方に、上体の斜めの切断に対応するように底面からの高さが異なる位置に突起がある。上体のものよりもわずかに径の大きい孔がある。胎土には海綿状骨針が混入する。周辺部の遺物出土傾向から判断すると、後期初頭天祐寺式に相当する時期のものと思われる。

次に道内での類似例を述べる（縮尺は、3～5が1：4、そのほか1：6）。

①函館市戸井貝塚（戸井町教委1993）：2個体ある（1、2）。1の口頸部は欠損する。胴部の中央よりやや下部で張り出すもので、突起はない。切断面は胴部上方、磨消縄文によりJ字状や波頭状文様がある。中期末葉大木10式併行のもの。2については報告書では明言されていないが、切断壺形土器の可能性が高いものとして取り上げておく。胴部がそろばん玉状に張り出す器形で、高台状の上げ底である。無文地に沈線での渦巻文がある。突起はない。底部側面に溝（2か所か）が切られている。後期前葉涌元式併行のものであろう。

②函館市浜町A遺跡（戸井町教委1990）：3は住居跡HP-1床面から出土したもの。高さ4.5cmで、ほぼ形を保っている。無文地に沈線による渦巻状文様が施されている。胴部下半部が強く張り出し、高台状の底部があるもので、この付近で切断されている。切断は竹ひご状工具である。上体では頸部下に、下体では底部付近にそれぞれ2か所に突起があり、径1.5mmの孔が穿たれている。また底面に1条沈線が引かれている。後期前葉涌元式併行のものと推定される。

③函館市石倉貝塚（函館市教委1999）：胴部の破片が2点報告されている（4、5）。切断面の位置がはっきりとしないため全体の様相は知られない。いずれも赤彩で、5は内外面に施されている。4は内面に炭化物が付着するもので、3条一組の沈線による文様がある。後期前葉十腰内1式相当のもの

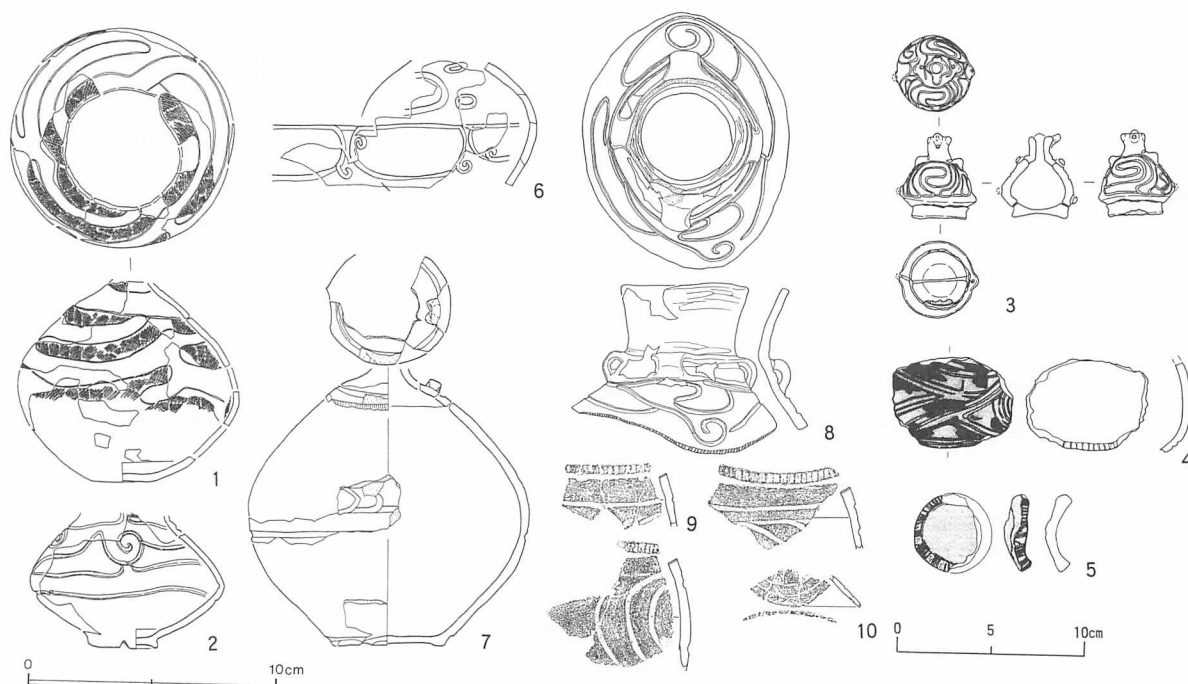
であろう。

④北斗市矢不來 2 遺跡（北埋調報37）：破片資料のため全体の様相は知られないが図上復元を含め 2 個体ある（6、7）。いずれも口頸部は欠損する。6は沈線での区画に楕円形文様が配される。底部付近に切断面がある。7は胴部上側に切断面があり、上体では切断面の 1 か所に抉りがあり、その対になる位置に橋状把っ手がある。いずれも後期前葉涌元式に相当する。

⑤森町濁川左岸遺跡A地区（北埋調報208）：3 個体ある（8～10）。8は上体のみが復元できたものである。9（3点）、10は胴部破片である。8は縄文後期前葉の住居跡（H-20）の覆土から出土した。口頸部の径は10.5cm。赤彩土器とみられる。半肉彫りの沈線による文様のもので 4 か所に把手があり、また頸部内面にはC字型の張り出しがある。切断面は胴部上半で、草本状のものでなされる。沈線による文様を分断しないよう考慮しているためであろう、切断面は水平ではない。後期前葉涌元式に相当する。

葛西ら（2003）によると、この種の土器は、大きさが最大で32cm前後、最小で 5 cm前後であり、中でも高さ10～15cm、口径が 2～4 cmに収まる細首形が多い。また、切断個所の位置（胴部最大部分の上方・下方）と突起の有無により 4 種類に細分されている。これによると集成された資料の 4 割以上が、胴部上方切断で突起を有する石倉 1 遺跡の類（I 型A類）である。また、突起に穿たれた孔は、使用に際し、上下を接合する必要性からこの部分に紐を通し縛ったものとみられる。戸井貝塚資料の底部側縁の切り込み（2）、浜町A遺跡資料の底面の沈線（3）などについては、紐を底部から発する時の「引掛け」とみている。さらに、突起の有無に関係なく、接合に際し何らかの膠着剤（アスファルト、漆、松脂など）を使用し「目張り」を施す例がわずかにある（青森市蛭沢遺跡・三内遺跡など）。このほか口頸部欠損（石倉 1 遺跡や戸井貝塚出土資料など）が、上下合体個体の 7 割以上に認められることから、事由についての言及はないが、破損が故意になされた可能性が高いことも指摘されている。

このように、土器を切断し、再び接合し使用する意図およびその用途は何であろうか。葛西は再葬土器棺墓との相関関係を示唆しており、成田（1999）もまた埋葬時の容器や副葬品・供献品との関連性を指摘している。いずれにせよ日常性から離れた特殊な容器であることは間違いない。（遠藤）



図Ⅶ-7 北海道内出土の切断壺形土器

引用参考文献

論文等

- 阿部明義2004「フローテーションによる微細遺物の採取と分析」『森町石倉2遺跡』(財北海道埋蔵文化財センター 北埋調報197)
- 安藤重幸1983「ボーリング結果からみた濁川カルデラの構造」『月刊地球』Vol 5 - 2 海洋出版株式会社
- 五十嵐昭明・佐藤浩・井出俊夫・西村進・角清愛1978「北海道茅部郡濁川地熱地域の熱水変質帯」『地質調査報告 日本の地熱地域の熱水変質帯の地質学的研究その1』第259号 地質調査所
- 石塚友希夫・中村俊夫・奥野充・木村勝彦・金奎漢・金伯禄・森脇広2003「白頭山火山の10世紀における巨大噴火の高精度AMS¹⁴C年代測定」『名古屋大学加速器質量分析業務報告書』14
- 大島直行2000「北海道の水場遺構」『月刊 考古学ジャーナル』No457 ニュー・サイエンス社
- 大泰司統2003「VI成果と課題3.石器」『森町濁川左岸遺跡-B地区-』(財北海道埋蔵文化財センター北埋調報190)
- 大泰司統2004「VI成果と課題2.土器・土製品」『森町濁川左岸遺跡-A地区』(財北海道埋蔵文化財センター 北埋調報208)
- 葛西 勵・小幡育恵2003「切断壺形土器(切断土器)の研究」『市史研究あおり』6
- 小山正忠・竹原秀雄2004『標準土色帖』26版 日本色研事業株式会社
- 勝井義雄2007「北海道駒ヶ岳」『北海道の活火山』北海道新聞社
- 金子浩昌2003「濁川左岸遺跡の出土骨」『森町濁川左岸遺跡-B地区-』(財北海道埋蔵文化財センター 北埋調報190)
- 金子浩昌2006a「森町三次郎川右岸遺跡の動物遺体」『森町三次郎川右岸遺跡』(財北海道埋蔵文化財センター 北埋調報233)
- 金子浩昌2006b「森川3遺跡出土骨貝類」『森町森川3遺跡(2)』(財北海道埋蔵文化財センター 北埋調報234)
- 小島朋夏1999「北海道式石冠の分布とその意義」『北海道考古学』第35輯 北海道考古学会
- 坂本尚史「スクレイパーの形態と機能について」2002『八雲町野田生4遺跡』(財北海道埋蔵文化財センター 北埋調報171)
- 佐々木由香2000「縄文時代の「水場遺構」に関する基礎的研究」『古代』第108号 早稲田大学考古学会
- 佐藤孝雄1993「有珠ポンマ遺跡の動物遺体」『ポンマ』伊達市教育委員会
- 鈴木 信2006「骨同定に関する見解ーヒグマ焼骨とイノシシ焼骨が共存する意味について」『江別市対雁2遺跡(8)』(財北海道埋蔵文化財センター 北埋調報231)
- 高橋 理1995a「高岡1遺跡出土の動物遺存体」『豊浦町高岡1遺跡(3)・高岡2遺跡』(財北海道埋蔵文化財センター 北埋調報106)
- 高橋 理1995b「F-4出土の骨片について」『豊浦町東雲遺跡』(財北海道埋蔵文化財センター 北埋調報107)
- 高橋 理2006「鷺ノ木4遺跡出土動物」『鷺ノ木4遺跡』森町教育委員会
- 高橋 理2008「北海道茅部郡森町鷺ノ木遺跡出土動物分析報告」『鷺ノ木遺跡』森町教育委員会
- 高橋 理・太子夕佳2001「白老町虎杖浜2遺跡出土動物遺存体」『白老町虎杖浜2遺跡』(財北海道埋蔵文化財センター 北埋調報158)
- 高橋 理・山崎京美2002「八雲町栄浜1遺跡出土動物遺存体」『八雲町栄浜1遺跡』(財北海道埋蔵文化財センター 北埋調報175)
- 高橋正勝1971「北海道における擦石・石冠について」『北海道の文化』22 北海道文化財保護協会
- 立田 理2002「刃部に光沢のある石器について」『八雲町野田生2遺跡』(財北海道埋蔵文化財センター 北埋調報167)
- 谷島由貴2003「遺跡周辺の環境」『森町本茅部1遺跡』(財北海道埋蔵文化財センター 北埋調報191)
- 椿坂恭代2006「森町三次郎川右岸遺跡から出土した炭化植物」『森町三次郎川右岸遺跡』(財北海道埋蔵文化財センター 北埋調報233)
- 土居繁雄1960『北海道渡島国森町の地質』北海道立地下資源調査所
- 中村有吾・平川一臣2004「北海道駒ヶ岳起源の広域テフラ、駒ヶ岳gテフラの分布と噴出年代」『第四紀研究』43-3
- 名越幸生1994「濁川カルデラの火砕堆積物」『日本火山学会講演予稿集1994年度秋季大会』
- 成田滋彦1986「切断蓋付土器考」『弘前大学考古学研究』第3号 弘前大学考古学研究会
- 成田滋彦1999「異形土器 切断蓋付土器ー出土状況と器形を考えるー」『研究紀要』第4号 青森県埋蔵文化財センター
- 西本豊弘1981a「動物遺存体について」『尾白内』森町教育委員会
- 西本豊弘1983a「動物遺存体」『南有珠6遺跡』札幌医科大学解剖学第二講座
- 西本豊弘1983b「栄浜1遺跡出土の動物遺存体」『栄浜』八雲町教育委員会
- 西本豊弘1986「有珠善光寺2遺跡出土動物遺存体」『有珠善光寺2遺跡』伊達市教育委員会

西本豊弘1987「高砂貝塚出土の動物遺体」『高砂貝塚』札幌医科大学解剖学第二講座

西本豊弘1989「動物遺体」『有珠善光寺 2 遺跡Ⅱ』伊達市教育委員会

西本豊弘1993「八木A遺跡出土の動物遺体」『八木A遺跡・ハマナス野遺跡』南茅部町埋蔵文化財調査団

西本豊弘1999「伊達市北黄金貝塚出土の動物遺体」『国指定史跡北黄金貝塚発掘調査報告書―水場遺構の調査 2 ―』伊達市教育委員会

西本豊弘・新美倫子1992「コタン温泉遺跡出土の動物遺体」『コタン温泉遺跡』八雲町教育委員会

日本ペトロロジー学会編2000『土壌調査ハンドブック改訂版』博友社

福井淳一1999「45―30区周辺遺物集中区について」『函館市中野B遺跡』(財北海道埋蔵文化財センター 北埋調報130

福井淳一2004「土坑覆土中の焼土検出動物遺存体について」『森町倉知川右岸遺跡』(財北海道埋蔵文化財センター 北埋調報196

福井淳一2008「動物遺存体の出土状況」『釧路町天寧 1 遺跡』(財北海道埋蔵文化財センター 北埋調報254

福井淳一2010「北海道における縄文文化～続縄文文化のアスファルト利用について」『池上悟還暦記念論文集』印刷中

北海道火山灰命名委員会編1982『北海道の火山灰』北海道火山灰命名委員会

北海道立地下資源調査所1973『濁川』 5 万分の 1 地質図幅説明書

北海道立地下資源調査所1986『駒ヶ岳』 5 万分の 1 地質図幅説明書

町田 洋・新井房夫2003『新編火山灰アトラス』東京大学出版会

南北海道考古学情報交換会2009『第30回南北海道考古学情報交換会』資料

森町1960『北海道渡島国森町の地質』

森町1980『森町史』

八雲町1974『八雲町の地質』

柳井清治・鷹沢好博・古森康晴1992「最終氷期末期に噴出した濁川テフラの層所と分布」『地質学雑誌』第98巻 2 号

山崎京美1998「高砂貝塚出土の動物遺存体について」『高砂貝塚』虻田町教育委員会

山田悟郎・柴内佐知子1997「北海道の縄文時代遺跡から出土した堅果類―クリについて―」『北海道開拓記念館研究紀要』第25号 北海道開拓記念館

山田悟郎2001「北海道南部渡島半島の遺跡から出土する植物遺体」『一南北海道考古学情報交換会20周年記念論集―渡島半島の考古学』南北海道考古学情報交換会20周年記念論集作成実行委員会

吉川純子2006「臼尻小学校遺跡から出土した炭化種実」『函館市臼尻小学校遺跡』函館市教育委員会・特定非営利活動法人函館市埋蔵文化財事業団

渡辺 誠2000「水場遺構研究の視点」『月刊 考古学ジャーナル』No457 ニュー・サイエンス社

遺跡調査報告書

(財北海道埋蔵文化財センター1987a『上磯町矢不来 2 遺跡』北埋調報37

(財北海道埋蔵文化財センター1987b『木古内町建川 2 ・新道 4 遺跡』北埋調報43

(財北海道埋蔵文化財センター1988『木古内町新道 4 遺跡』北埋調報52

(財北海道埋蔵文化財センター1996『七飯町大中山13遺跡 (3)』北埋調報111

(財北海道埋蔵文化財センター1997『七飯町鳴川右岸遺跡・桜町遺跡』北埋調報112

(財北海道埋蔵文化財センター2001a『白老町虎杖浜 2 遺跡』北埋調報158

(財北海道埋蔵文化財センター2001b『八雲町山崎 4 遺跡』北埋調報162

(財北海道埋蔵文化財センター2001c『八雲町山越 2 遺跡』北埋調報163

(財北海道埋蔵文化財センター2003a『八雲町落部 1 遺跡』北埋調報181

(財北海道埋蔵文化財センター2003b『森町本内川右岸遺跡』北埋調報182

(財北海道埋蔵文化財センター2003c『八雲町野田生 1 遺跡』北埋調報183

(財北海道埋蔵文化財センター2003d『森町濁川左岸遺跡―B地区―』北埋調報190

(財北海道埋蔵文化財センター2003e『森町本茅部 1 遺跡 (2)』北埋調報191

(財北海道埋蔵文化財センター2004a『森町倉知川右岸遺跡』北埋調報196

(財北海道埋蔵文化財センター2004b『森町石倉 2 遺跡』北埋調報197

(財北海道埋蔵文化財センター2004c『森町本茅部 1 遺跡 (2)』北埋調報199

(財)北海道埋蔵文化財センター2004d『森町石倉3遺跡・石倉5遺跡』北埋調報205
(財)北海道埋蔵文化財センター2004e『森町濁川左岸遺跡―A地区―』北埋調報208
(財)北海道埋蔵文化財センター2005a『森町上台2遺跡』北埋調報216
(財)北海道埋蔵文化財センター2005b『森町上台1遺跡』北埋調報217
(財)北海道埋蔵文化財センター2005c『森町森川4遺跡』北埋調報218
(財)北海道埋蔵文化財センター2005d『森町三次郎川左岸遺跡・石倉5遺跡(2)石倉4遺跡』北埋調報219
(財)北海道埋蔵文化財センター2005e『森町森川3遺跡』北埋調報222
(財)北海道埋蔵文化財センター2006a『森町三次郎川右岸遺跡』北埋調報233
(財)北海道埋蔵文化財センター2006b『森町森川3遺跡(2)』北埋調報234
(財)北海道埋蔵文化財センター2007a『森町濁川左岸遺跡(3)―C～E地区―』北埋調報246
(財)北海道埋蔵文化財センター2007b『森町石倉1遺跡』北埋調報247
戸井町教育委員会1990『浜町A遺跡』
戸井町教育委員会1993『戸井貝塚Ⅲ』
七飯町教育委員会1983『大中山5遺跡』
函館市教育委員会1999『函館市石倉貝塚』
松前町教育委員会1974『松前町大津遺跡発掘調査報告書』
松前町教育委員会1983『白坂』
南茅部町教育委員会1978『白尻B遺跡発掘調査概報』
南茅部町教育委員会1979『白尻B遺跡発掘調査報告』
南茅部町教育委員会1984『ハマナス野遺跡Ⅹ』別冊資料集
森町教育委員会1975『鳥崎遺跡』
森町教育委員会1977『森町オニウシ遺跡発掘調査報告』
森町教育委員会1981『尾白内』
森町教育委員会1982『森川A遺跡』
森町教育委員会1985『御幸町』
森町教育委員会1993『尾白内2』
森町教育委員会1994『御幸町2』
森町教育委員会2004a『栗ヶ丘1遺跡』
森町教育委員会2004b『森川2遺跡』
森町教育委員会2004c『鷺ノ木4遺跡』
森町教育委員会2006a『鷺ノ木4遺跡』
森町教育委員会2006b『鷺ノ木7遺跡』
森町教育委員会2007『森川5遺跡』
森町教育委員会2008a『駒ヶ岳1遺跡』森町文化財調査報告書 第13集
森町教育委員会2008b『鷺ノ木遺跡』森町文化財調査報告書 第14集
森町教育委員会2008c『鷺ノ木遺跡』森町文化財調査報告書 第15集
森町教育委員会2008d『町内遺跡発掘調査事業報告書Ⅰ』森町文化財調査報告書 第16集
森町教育委員会2009『町内遺跡発掘調査事業報告書Ⅱ』森町文化財調査報告書 第17集
八雲町教育委員会1995『浜松5遺跡』